

音楽の世界

Monthly journal "The World of Music"

1982年10月14日第三種郵便認可
第52巻2号 通巻546号
2013年2月1日発行
(毎月1回1日発行)

ISSN 1342-5463

音楽家が自ら作るマンスリージャーナル

2013年
2月号

特集

『特集』動き、動作、所作と音楽〜その2〜

桜井真樹子・荻野仁子・清道洋一・高橋通

論壇 時流に乗り遅れている？振り回されている？ 黒滝 玲子

リレー連載 未来の音楽人へ (2) 大久保 靖子

連載

音・雑記—ひなの里通信—
名曲喫茶の片隅から

音盤奇譚

私とラジオ・ドラマ (8)

福島日記 (17)

コンサートレポート 声楽部会「2013年新春に歌う」

電子楽器レポート (全4回-3) 岡方 佳

コンサート案内: 第5回フランス歌曲研究コンサート

緑の風を支援するチャリティーコンサート

コンサートアロケラム: 第2回『動き、舞踊、所作と音楽』



今年生誕200年を迎えるリヒャルト・ワーグナー



日本音楽舞踊会議

The Confraternity of Music and Dance Japan

アラブの撥弦楽器ウードから学んでいること

ウード奏者 荻野 仁子

私はアラブの撥弦楽器ウードという楽器に出会い、アラブ音楽・トルコ音楽・スペインセファルディ音楽という音楽を演奏しながら、時にはベリーダンスとの共演もあり、多くを学んでいます。今回はベリーダンサーsaamiya さんからのご紹介で、アラブ音楽とベリーダンスを通じた私の経験や音楽への思いを書くという機会に恵まれました。大変感謝申し上げます。

音が苦から音楽へ

中学の時の数学の先生が、新学期にまず黒板に大きく書いたのが「数が苦から音楽へ」という言葉でした。その当時、幸いにして私は数学が好きだったので単純にこの言葉が気に入っていただけでしたが、音楽にも同じことが言えるのかなと思います。

私はピアノを3歳くらいから始め、楽しく弾けたのは小学4年くらいまででした。それから先はひたすら難易度の高い有名曲を弾きこなすための訓練を毎日しなければならなかったし、そうしないと不安でした。自分のピアノの技術に関しては10歳くらいで諦めましたが、練習を積み重ねれば、何かが見えるのかもしれないと期待しそのまま大学に入るまで頑張りました。確かに見えたものはありました。自分という小さな存在が、楽譜として残っている楽曲を鍛練して弾くことによって、作曲家の感情や意図が現れてきて、私の指・手・腕・全身を通して美しいメロディ音楽として流れ出てくることを体感したとき、最初は驚き、そして弾きながら涙が溢れ出てきました。幻だったかもしれませんがその時味わった感動は忘れられません。しかし、同じ感動をもう一度味わいたいと狙うほどに遠くなり、そのうちつまらなくなり、音が苦のまま20歳を前にピアノを弾くことをやめました。

そこから10年ほど音楽から離れ、そしてまた戻って来ました。日本の良さは、日本を離れて良くわかる、のと同じように、私にとっては少し離れた時間があってことで、幸運にもまた音楽を好きになってきました。音を奏でる楽しさは、外向きではなく内側のもっと深いところにあるのかな、と思うようになってきました。

ウードとの出会い

私がウードを知ったのは、何回目かのエジプト行きのある時、知人からウードの写真を渡された時でした。それを買ってくるように頼まれました。私は古代エジブ

トに憧れ大学を1年休学しエジプトへ留学をし、それからはお金と時間が許せばエジプトへ行くという生活を送っています。しかし、リュック1つでエジプトに行く私にとって、当時ウードなる楽器を手頃な値段である程度のものを買い、手荷物で持って帰ってくることは少し大変なことでした。そしてその後持ち帰ったそのウードを渡し任務完了でしたが、彼女は自宅に飾ったまま弾かずに時がたち、そのうちに結局ウードが私のところへ戻ってきました。そんな出会いですから、半信半疑、ダメ元で始めたウードでした。

そんなウードをソロで弾く人が日本にいると知り、2003年9月聴きに行ってみることにしました。そのころすでに2年近くウードでのバンド活動をしていました。全く弦楽器を弾いたことのない私でしたが、1週間である程度のメロディーが弾けるようになり、民族楽器とはこんなものなのか、と多少つまらなさを感じ始めていた頃でした（今考えると恐ろしいことです）。しかしその方の演奏は、今まで聴いたことのない音楽と音色でした。わたしは衝撃と感動を覚えその日に弟子入りし、現在に至ります。

ウードとは西洋のリュート、日本の琵琶の原型となった楽器と言われています。琵琶の膨らみは大体10センチほどですが、ウードは洋梨を縦に切ったような形をしていてボディの後ろが丸く膨らんでいるので、ギターのように構えて自分の手先をみようとするくとクルンとひっくり返ってしまいます。見ずに演奏しています。リュートにはフレットがありますが、ウードにはありません。ないことによって西洋音楽にはない音程を弾きだすことができ、私はそこに大きな魅力を感じます。

アラブ音楽とベリーダンス

アラブ音楽とは、歴史を溯れば古代エジプト、古代ギリシャ・ローマ、ササン朝ペルシャそしてオスマントルコ帝国を経て、様々な土地で、アラブ人に多いイスラム教徒ばかりでなく、ユダヤ教徒キリスト教徒もその伝統を受け継ぎ発展してきました。アラブ音楽の文化圏は広く、北アフリカ、中近東そしてトルコ音楽、ペルシャ音楽と相互に影響を及ぼしあっています。2012年3月号P14～18でベリーダンサーのsaamiyaさんも「日本とアラブの舞踏と文化」というタイトルで書いてくださっていますが、ベリーダンスで使用される音楽は主にアラブ音楽やトルコ音楽などの古典やPOPS・歌謡曲、そしてフュージョン音楽などで、それぞれに合ったダンススタイルや衣装で踊られます。特徴があるのは、



それらのリズムと使用されている音階、そして楽器・音色です。リズムのことをアラブ音楽ではイーカー、音階をマカームと呼びます。イーカーには2、3、4拍子の他に5、7、9、10拍子等多様にあり、太鼓だけでも十分にベリーダンスとの共演が可能です。またマカームはイラクやエジプト、トルコ、イラン、湾岸地域、マグリブ地方(リビヤ～モロッコ)などで違いがあり全てを把握することはできませんが、そのマカームに基づいた即興演奏(タクシム)を行うのが演奏家としての腕の見せどころです。アラブ文化のもとで育った人間ではないわたしには、タクシムの習得は永遠の課題です。単なる使用音階としてマカームを使うのではなくマカームの構成とその構成パターン、そして古典的レパートリーの組み合わせで音を紡いでいきます。西洋音楽の音階のようなもの、であり、音階ではないもの、です。即興性とそれに伴った技術・能力の高さが要求されるのがアラブ音楽と言えます。

MUSIC and DANCE

2011年12月ウード修行のためアブダビとカイロを訪れ、ついでにスペインまで足を伸ばしました。

スペインは、バルセロナ、マドリッド、コルドバ、セビージャ、グラナダを巡り、各地でフラメンコやコンサートを出来るだけ多く観てきました。テーマは、音楽とダンス、ミュージシャンとダンサーでした。

容姿端麗で華麗な衣装を身にまとい、素晴らしいテクニックの演奏、情熱的な力強いダンス。例えばそれらがいかに素晴らしくても、彼らの何気ない立ち振る舞いや表情(所作)によって、その魅力が失われることもしばしばありました。そのことに向かう姿勢や彼ら自身の想いがなければ、何も伝わらない。そしてミュージシャンとダンサーに関しては、やはり双方ともまずは一人の人間としてどう生きようとしているか、というところが非常に大切であると感じました。生演奏でダンスと合わせる時に何に注意するかと聞かれれば、ダンサーさんの性格に注意します、と答えてしまうかもしれません。

音楽現代

2013年2月号 定価840円

♪特集=これまでも、これからも聴き続ける愛聴盤
(CD&DVD)

♪特別企画=2013年来日する演奏家たち
～鍵盤楽器奏者、弦楽器奏者、
室内合奏団、歌手、他

インタビュー
マッシモ・ジョルダーノ、井上道義
尾高忠明、小森谷巧

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11
TOMYビル3F
芸術現代社 TEL.3861-2159

音楽の先生へ

私は教育学部を卒業しました。少しでも教育的なことも書きたいと思います。

私は今、ウードという楽器を弾いています。フラメンコといえばフラメンコギター、インド音楽といえばシタール、アラブ音楽といえばウードです。アラブ世界では有名な楽器ですが、日本では知名度はありません。クラシック、POPS、ロック、JAZZ、欧米化された音楽を演奏することと、欧米化されずに守ってこられた国の音楽を演奏することは変わりないと思っていますが、今日日本でアラブ音楽をウードで演奏することは、どんなところであっても挑戦です。

アラブ音楽では、鍵盤にない音も使います。私は、普遍的な音を出すピアノこそ最高の楽器と思っていましたし、何かメロディを聴けば頭の中の鍵盤で音を探るということを勝手にしていましたから、鍵盤にはない音・微分音(1/4音)の存在を知ったとき悔しかったです。アラブ音楽では、時にリズムを取ることもできず、どこが頭なのか分からなくなり、アラベスク模様のように永遠につながっていく錯覚に陥るメロディラインに乗って、果てしない時間の流れを感じるがあります。そんなときは音楽を感じることはできません。私にとっては、この音楽をただ感じるのがとても重要でした。つまりは鍵盤からの解放、音楽からの自由です。

音楽教育の現場に携わっている方に、5拍子、7拍子、9拍子、10拍子等、様々な形式の音楽が世界にはあるということも、知って頂けたらいいなと思っています。それは馴染めなかつたりもしますが、音楽の世界はそんなところからも広がりますし、音楽で自由を味わうことができ、その自由は広げることもできます。音楽が幸せなのは、そこにもあります。

そしてミスなく完璧な演奏が最高のものとは、私は思いません。その人の生き方や人生がにじみ出る演奏、音楽の面白さはそこにあると今は思っています。私はまだ若輩ですが、一人の人間として精神的にも自立し、一歩ずつ自分のチカラで歩いていけることが目標です。音楽はそのためのひとつの手段であり、依存の対象であってはいけないと思っています。生き抜いていく力は音楽にあります。

最後に紙面をお借りして、本文を書くに至ってご助言下さったトルコサズ奏者の藤井良行氏と、私にウードという素晴らしい世界を教えてくださいましたウード奏者の常味裕司氏に深く感謝申し上げます。

(おぎの・さとこ：ウード奏者)

